池端屋敷小路遺跡

清里地区南北幹線２期整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２０．７

前橋市教育委員会

池端屋敷小路遺跡

清里地区南北幹線２期整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２０．７

前橋市教育委員会

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する池端屋敷小路遺跡は、本市西部清里地区の池端町にあります。清里地区には平成の古墳総合調査によって多数の古墳のあったことが確認されており、今回の調査では「清里村３号墳」周堀などが検出されました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められことができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和２年７月

前橋市教育委員会
教育長　　吉　川　真由美

例　　言

1　本報告書は清里地区南北幹線２期整備事業に伴う池端屋敷小路遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	池端屋敷小路遺跡（遺跡コード２A253）
調査場所	群馬県前橋市池端町 154-10、154-11
監理指導	小峰　篤（前橋市教育委員会）
調査担当者	高橋政充（技研コンサル株式会社）
調査員	茂木祐輔（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和２年５月 20 日～令和２年６月８日
整理・報告書作成期間	令和２年６月 15 日～令和２年７月 30 日

3　本書の原稿執筆はⅠを小峰、Ⅳを茂木、他を高橋が担当し、編集作業は佐野良平（技研コンサル株式会社）が行った。

4　発掘調査・整理作業参加者は次のとおりである。

大川明子（技研コンサル株式会社）

安藤三枝子　池田正恵　伊丹茂一　大山四郎　後藤次雄　小林克宏　佐藤文江　塩野谷和夫　杉田友香　曽根　裕　曽根良美　田所順子　立川千栄子　永井憲一　西山康子　星野一江　細野竹美

5　本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管している。

6　下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

山下工業株式会社

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『渋川』『伊香保』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。

3　遺構名称は、古墳周堀：M、溝跡：W、土坑：Dである。

4　遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　古墳周堀、溝跡、土坑・・・1/60　　全体図・・・1/200

遺物　土器・陶磁器・・・1/3、1/4

5　本文および表中の計測値については（　）は現存値を、〔　〕は復元値を表す。

目　　次

はじめに

例言・凡例

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位地と環境 …… 2

Ⅲ　調査方針と経過 …… 4

Ⅳ　基本土層 …… 4

Ⅴ　遺構と遺物 …… 5

Ⅵ　まとめ …… 9

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市長　山本　龍（道路建設課）（以下「前橋市」という。）が施工する清里地区南北幹線２期整備事業に伴い実施されたものである。当該工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（前橋市 0107 遺跡・前橋市 0885 遺跡）内であることから、試掘確認調査（以下「試掘調査」という。）を実施した。

試掘調査は、事業地の一部が竹林であり、伐採等が必要となったため２回に分けて行なった。１回目の試掘調査は、令和元年５月 23 日に実施した。調査の結果、近・現代の溝跡が１条確認されたのみであったため、１回目の試掘調査対象地における工事施工については支障ないものと判断した。２回目の試掘調査は、令和２年２月 19 日に実施した。今回の試掘調査対象地は、『上毛古墳総覧』に「清里村３号墳」と記される古墳（現在は神明宮が鎮座している）の西側隣接地にあたることから、古墳周堀の検出が想定された。調査の結果、1108 年降下の浅間Ｂ軽石が堆積する掘り込みが確認されたため、周堀の可能性が高いと判断し、埋蔵文化財の取扱いについて前橋市と協議した。工事計画から遺構の現状保存は困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査（以下「発掘調査」という。）を実施することで、前橋市と合意した。

令和２年４月６日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査･整理業務に係る依頼が、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年５月 15 日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「池端屋敷小路遺跡」（遺跡略コード：2A253）の「池端」は町名を採用し、「屋敷小路」は旧小字名を採用した。

Fig.1　遺跡の位置

Ⅱ　遺跡の位置と環境

遺跡の位置（Fig. 1・2）

本遺跡が所在する池端町は前橋市の西端部に位置し、北部は吉岡町、西部は榛東村と接する地域である。遺跡から東側400 mには関越自動車道路が南北に縦走し、駒寄ＳＩＣの出入口が接する。西側750 mには県道25号線高崎渋川線が走行する。周辺域は吉岡バイパス・上毛大橋の開通、駒寄SICの開設等の交通網整備が進み、小規模住宅団地の造成やショッピングモールの商業施設の進出により発展を遂げている。現在、駒寄SIC大型車対応化整備事業や県道161号線の駒寄SIC南から県道25号線に至る区間の工事が進行しており、更なる発展が期待されている。

本遺跡の地質は隣接する吉岡町南部の後期更新世後半の扇状地、すなわち榛名山麓から広がる相馬ヶ原扇状地の南東部にあたる。

歴史的環境（Fig. 3、Tab. 1）

旧石器時代の遺跡については本地域および周辺において、確認されていない。

縄文時代の遺跡では七日市遺跡（2）で前期の住居跡が、清里長久保遺跡（7）では前期から中期の住居跡が検出され大久保Ａ遺跡（3）、清里・陣場遺跡（5）は縄文遺物の散布地として報告がなされている。

本地域では弥生時代の遺跡の報告例は少なく、清里・庚申塚遺跡（6）が中期環濠集落遺跡として知られている。

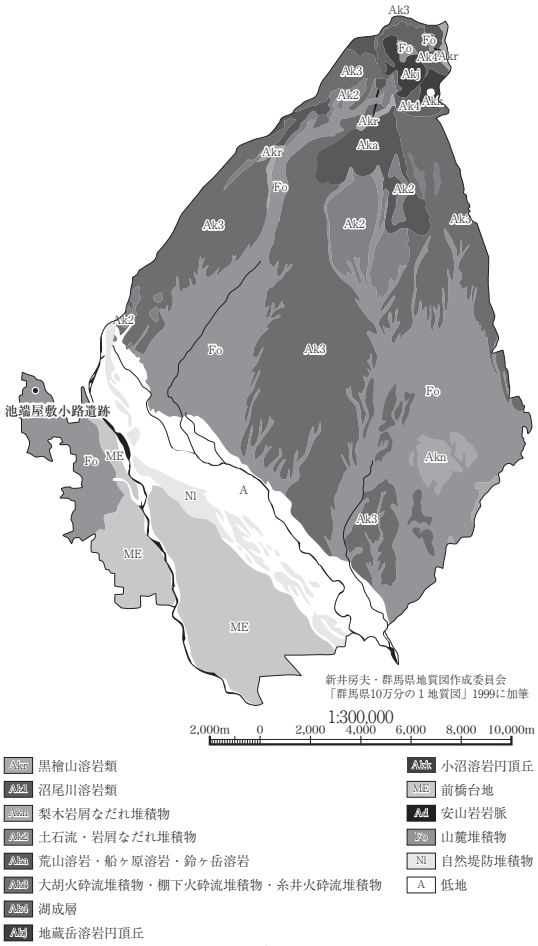


Fig. 2　前橋の地形

本地域の古墳については総社古墳群、朝倉・広瀬古墳群などの大規模な古墳群は存在しないが本地域の北側には七世紀後半と伝えられる南下古墳群（15）、東側にはほぼ時期を同じくする長坂古墳（16）、全国でも類例の少ない正八角形墳をもつ三津屋古墳（17）が存在する。また、本地域の西側には６世紀後半に比定される大藪城山古墳（18）、上八幡古墳群（19）、柿の木坂古墳群（22）、７世紀では、雛子古墳群（20）、長久保古墳群（21）が近い距離で点在する。この時期の住居跡を伴う遺跡としては、大久保Ａ遺跡において後期の住居跡が検出されている。

古代では、七日市遺跡、大久保Ａ遺跡では奈良・平安の遺構が多数検出し、製鉄関連遺構を検出した清里・陣場遺跡、清里・長久保遺跡では主に平安時代の遺構を数多く検出している。その他に奈良・平安時代の遺構・遺物を検出した遺跡は、片貝Ⅱ遺跡（9）、下八幡南遺跡（10）、掘立柱建物跡を検出した前原遺跡や中御所Ⅱ遺跡（12）、三疋遺跡（13）などがあげられる。これらの遺跡は地域的な片寄り無く、本地域の周辺に均等な分布を表しているものである。

本地域およびその周辺地域では、前橋市東部の微高地に数多く見られる環濠屋敷遺構の存在は確認できていない。中世以降、上州では長尾氏・長野氏といった豪族が割拠し、前橋市内においても城館が数多く知られている。南北朝期に活躍した桃井氏は桃井郷を本拠としており、大藪城山古墳を利用し構築した桃井城など関連する史跡が吉岡町・榛東村周辺に見られる。

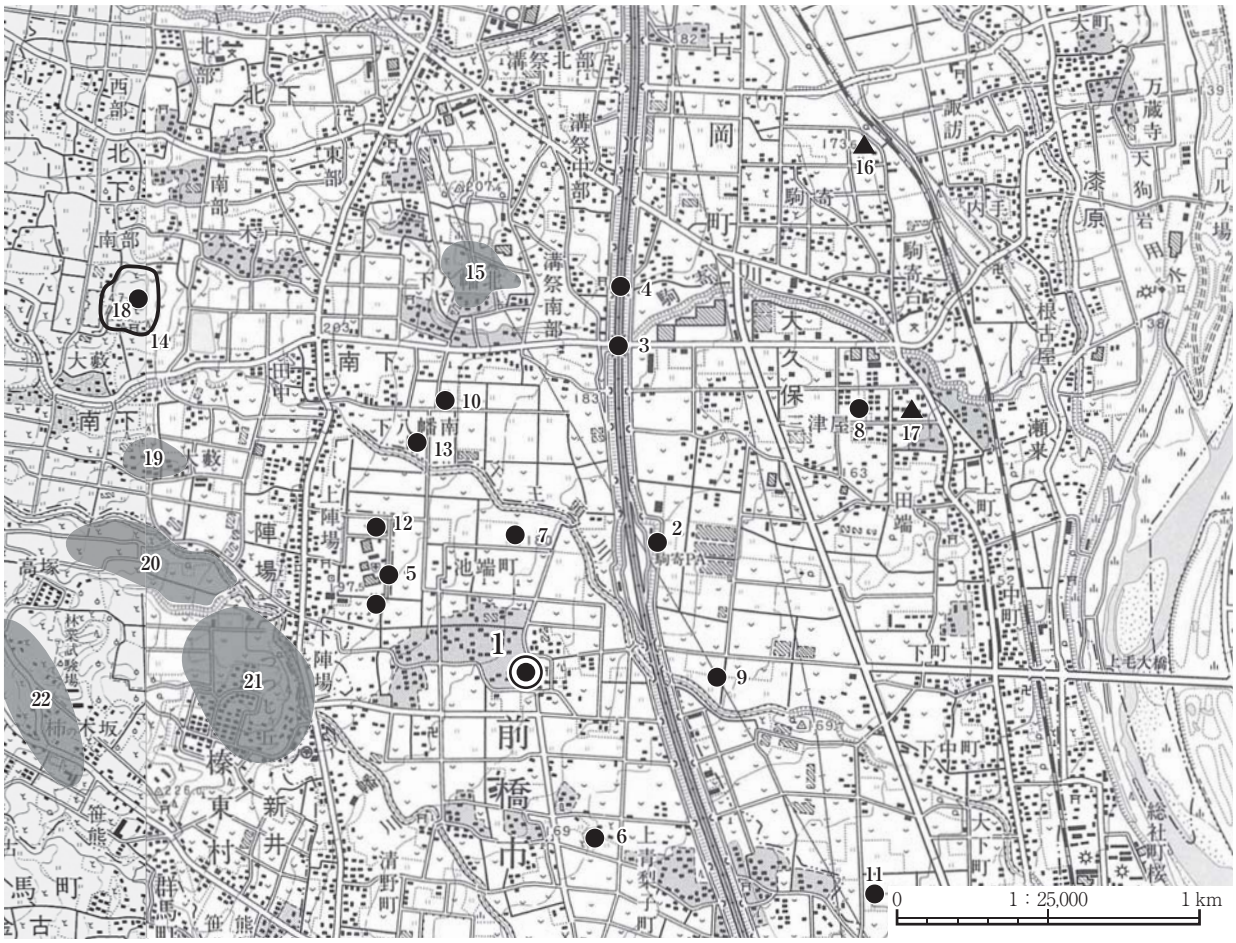


Fig. 3　周辺遺跡図

Tab. 1　周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	時代：主な遺構・出土遺物	報告書・参考文献
1	池端屋敷小路遺跡	本遺跡	–
2	七日市遺跡	縄文：前期住居・遺物散布、奈良平安：住居・溝、中世：畠状遺構・溝	吉岡村教育委員会　2017　『七日市遺跡』
3	大久保Ａ遺跡	縄文：遺物散布、古墳：後期住居、奈良平安：住居・掘立柱建物跡、中世：道路状遺構	吉岡村教育委員会　群馬県教育委員会　日本道路公団　1986『大久保Ａ遺跡　Ⅰ区』『大久保Ａ遺跡　Ⅱ区』
4	大久保Ｂ遺跡	平安：住居	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989　『有馬遺跡Ⅰ　大久保Ｂ遺跡』
5	清里・陣場遺跡	縄文：遺物散布、奈良平安：住居、製鉄関連遺構	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1981　『清里・陣場遺跡』
6	清里・庚申塚遺跡	弥生：中期後半環濠集落、古墳：古墳、平安：住居	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1981　『清里・庚申塚遺跡』
7	清里・長久保遺跡	縄文：前～中期住居、古墳：古墳、平安：住居・墓坑	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986　『清里・長久保遺跡』
8	本宿遺跡	平安：住居	吉岡町教育委員会　1991　『本宿遺跡』
9	片貝Ⅱ遺跡	奈良平安：住居	吉岡町教育委員会　2001　『片貝Ⅱ遺跡』
10	下八幡南遺跡	奈良平安：住居	吉岡町教育委員会　2002　『下八幡南遺跡』
11	前原遺跡	平安：住居・掘立柱建物・大溝、近世：石組遺構	吉岡町教育委員会　2002　『前原遺跡』
12	中御所Ⅱ遺跡	古墳：道路状遺構、平安：住居	吉岡町教育委員会　2005　『中御所Ⅱ遺跡』
13	三疋遺跡	奈良平安：住居	吉岡町教育委員会　2010　『三疋遺跡』
14	大藪遺跡	古墳：前方後円墳、中世：城館	吉岡町教育委員会　2012　『大藪遺跡』
No	遺跡名	年代、規模、特徴	
15	南下古墳群	7 世紀後半。Ａ号～Ｅ号の名称で知られている５基の古墳に代表され、古墳は大林山と呼ばれる岩屑流丘南斜面の半径 100 メートルほどの範囲内に集中して築造されている。	
16	長坂古墳	７世紀中頃か。円墳。全長 8.6 m、残存高 1.9 mを測る。昭和 40 年代の開発で破損、平成 21 年調査後消滅。	
17	三津屋古墳	７世紀後半。正八角形墳。墳丘は版築工法による２段から構築されており、上段が一辺６m、下段が一辺９mを測る。	
18	大藪城山古墳	６世紀末。前方後円墳。試掘調査により、全長 47m、後円部径 25m、前方部長 24m と想定されいる。後に桃井城に利用される。	
19	上八幡古墳群	–	
20	雛子古墳群	–	
21	長久保古墳群	７世紀代。前方後円墳２基を含む 22 基が確認されいる。多くが横穴式石室を持っている。	
22	柿ノ木坂古墳群	６世紀末。柿ノ木坂古墳は全長 30 m、高さ 3.9 mの円墳である。	

Ⅲ　調査方針と経過

１　調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、清里地区南北幹線２期整備事業地内であり、調査面積は 436.00 ㎡である。グリッド座標については世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用し、X ＝ 48,000、Y ＝ － 74,000 を基点とする４ｍピッチのものを使用し、経線を X、緯線を Y として北西隅を基点として番付けして呼称した。

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45 ㎡バックホー）にて表土掘削を行ない、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものは No 遺物とし、他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。

遺構の記録については、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集、記録写真は 35mm モノクロ・リバーサル、デジタルカメラの３種類を用いて撮影を実施した。

整理作業における出土遺物の断面計測・外面調整の撮影には、従来の手法から３Ｄスキャナー型三次元計測器（KEYENCE 社製、VL-300）による機械計測に切り替えた。誤差１mm の１/1,000 という高精度な全点取得が可能で、従来の２次元図化以外の用途にも発展性が見込めるものである。報告書掲載の遺物写真に関してはデジタルカメラ（CanonEOS ５D・EF200 ㎜ L）を用いて撮影を行った。遺構図に関してはデジタルによる修正・編集作業を行い、報告書の編集に関しては主に Adobe Illustrator CS5・InDesign CS5 を用いて DTP の手法で編集作業を行った。

２　調査経過

５月 20 日より現地での発掘調査を開始した。22 日から重機（0.45 ㎡バックホー）を使用した表土掘削を開始し、同時に遺物包含層の有無を確認した。26 日、作業員による遺構確認・掘削作業を開始。29 日、検出した２条の溝（Ｗ － １・２）からの湧水処理を行い、周堀（Ｍ － １）外周の立ち上がりの検出作業及び周堀の最深部の確認作業を行った。６月１日に各遺構の全景撮影、２日にドローンによる調査区全域の写真撮影を行った。２日に前橋市教育委員会の立会いによる完了検査が行われた。３日から８日まで埋め戻し作業、同時に原状復旧として整地・注意喚起立て看板・発掘区周辺のロープ撤去を行った。８日、発掘機材の撤収をもって現地での作業を終了した。整理作業は現地調査終了後の６月 10 日から開始した。７月 30 日に報告書を刊行し、全ての作業を完了した。

Ⅳ　基本土層

基本土層は南北に長い調査区の中央部に設定したＭ － １号周堀の断面土層（Fig. ６・７　Ｍ － １　SPB）にて観察した。各層については以下に記す

Ⅰ層は表土層。Ⅱ層は天仁元年（1108）の浅間山の噴火により噴出した As-B 軽石を含んだ砂質の黒色土、いわゆる「B 混土」である。Ⅲ層は 1128 年噴火の浅間粕川テフラ（As-Kk）の青灰色砂質細粒火山灰層、Ⅳ層は As-B 軽石一次堆積層上位のフォール・ユニット（桃色細粒火山灰層）、Ⅴ層は As-B 軽石一次的堆積層である。Ⅲ～Ⅴ層ともＭ － １の覆土で確認できるが、場所によっては残りの悪い場所も見られる。Ⅵ層は As-B 下の黒色土層、Ⅶ層はローム漸位層、Ⅷ層は小礫を含むローム層である。Ⅷ層に混入する小礫はⅧ層以下に堆積する陣場岩屑なだれに由来する岩塊に関係すると考えられる。

Ⅴ　遺構と遺物

池端屋敷小路遺跡の発掘調査においては、古墳時代後期・平安時代・中近世の遺構・遺物が検出された。古墳時代後期の遺構については、発掘区ほぼ全域が周堀に含まれるという特殊性を有するが、それについてはⅥ章で詳述するとして、本章では周堀の外周部としての記載とする。

Ｍ－１号周堀（Fig. ４・５・７、PL. １・２）

古墳は発掘調査区域外、発掘区東側に隣接する神明宮を墳丘頂部に鎮座させる直径約 24 ｍを計測する不正円形を呈し、現地表からの比高差は約４ｍを計測する。今回の発掘調査では、墳丘部を中心に巡る周堀の外周部が（X61 ～ 64、Y36 ～ 38）で一部に肩部として、その形状を現している。また外周肩部より南東方向側に向かい、本来の地形と異なる傾斜を現し周堀最深部を示していると考えられる。外周肩部と周堀最深部と思われる比高差は約 1.3 ｍを計測する。しかしながら周堀中央最深部と推定される区域は、群馬用水が通る場所（発掘区域外東側）と考えられる。また発掘区域内東端部にはＷ－１号溝が南北方向に縦断しており本来の最深部を計測することはできなかった。発掘区南側全域においては、発掘区北側の傾斜に比してその傾斜は比較的緩やかであるが本来の地形が示す傾斜であり、周堀内あるいは全周することの無い周堀南端部の可能性もあり、周堀外周部は発掘区域外である西側を巡るものと考える。この遺構の時期については出土遺物が少なく、疑問に思われる可能性も否定できないが、器形の判断できうる遺物（１）と古墳の規模・形状から、６世紀後半～７世紀初頭と考えられる。

Ｗ－１号溝（Fig. ４・５、PL. １・３・４）

位置は（X63、Y37 ～ 45）。主軸方向ははぼ南北を示す。ただし、東側の立ち上がりは調査区域外となり、西側壁と最深部が検出された形となる。検出長は 32 ｍを計測し、形状については発掘区の東側を南北に縦断する形を呈するが、北端部から南端まで直線上に同じ幅を持つものと考えられる。また、（X64、Y37）の溝北端と（X63、Y43）の位置からは湧水がみられた。出土遺物は陶磁器が数点出土しているが、その器形を判断できうる遺物は陶磁器の皿１点である。推定口径 140 ｍｍ、底径 70 ｍｍを計る。ロクロ整形の後染め付け、焼成は堅緻。時期的には 18 世紀後半から 19 世紀前半の肥前系陶磁器と考えられる。これらのことから、Ｗ－１号溝は江戸時代後期の排水溝と比定して良い。

Ｗ－２号溝（Fig. ４・５、PL. １・３・４）

位置は（X61・62、Y36 ～ 43）。（X61、Y37）が北東の角部となり、ほぼ東西・南北方向に居住地を方形に区画する溝（根切り溝）と考えられる。南北方向の検出長は 26 ｍ、東西方向は 3.5 ｍを計測する。ただし、東西方向については発掘区域外の西に溝が延びているのが確認できる。溝幅は、東西方向で３ｍ、南北方向最大幅（X61、Y37）２ｍを計測する。本来的な形状は根切り・区画の溝であり、方形を呈するものであるが、発掘区南側では、傾斜のため遺構確認面が北側に比して低く、溝幅・深さ共に小さい。出土遺物は陶磁器が数点出土しているが、その器形を判断できうる遺物は陶磁器の碗１点である。推定口径 122 ｍｍ、底径 65 ｍｍを計る。ロクロ整形の後染め付け、焼成は堅緻で、碗の内面には貫入が多く見られる。瀬戸・美濃系陶磁器であり、時期的にはＷ－１号溝の遺物同様、18 世紀後半から 19 世紀前半の所産と考えられる。

Ｄ－１号土坑（Fig. ５・７、PL. １～４）

（X62・63、Y36）に位置する。周堀外周部壁にⅡ層直下、Ⅶ層上面で検出された。覆土は２層に分かれ１層には As-B 軽石を少量含み、２層には焼土粒子・炭化物粒子を多量混入するが、底部には焼けた痕跡はない。規模は長軸 2.5 ｍ、短軸 1.5 ｍ、深さ 0.20 ｍを計測する不整楕円形、底部は鍋底状を呈する。遺物は土師器・須恵器ともに相当数出土したが、器形を判断できる遺物は４点（１～４）でいずれも須恵器の埦である。４点とも底

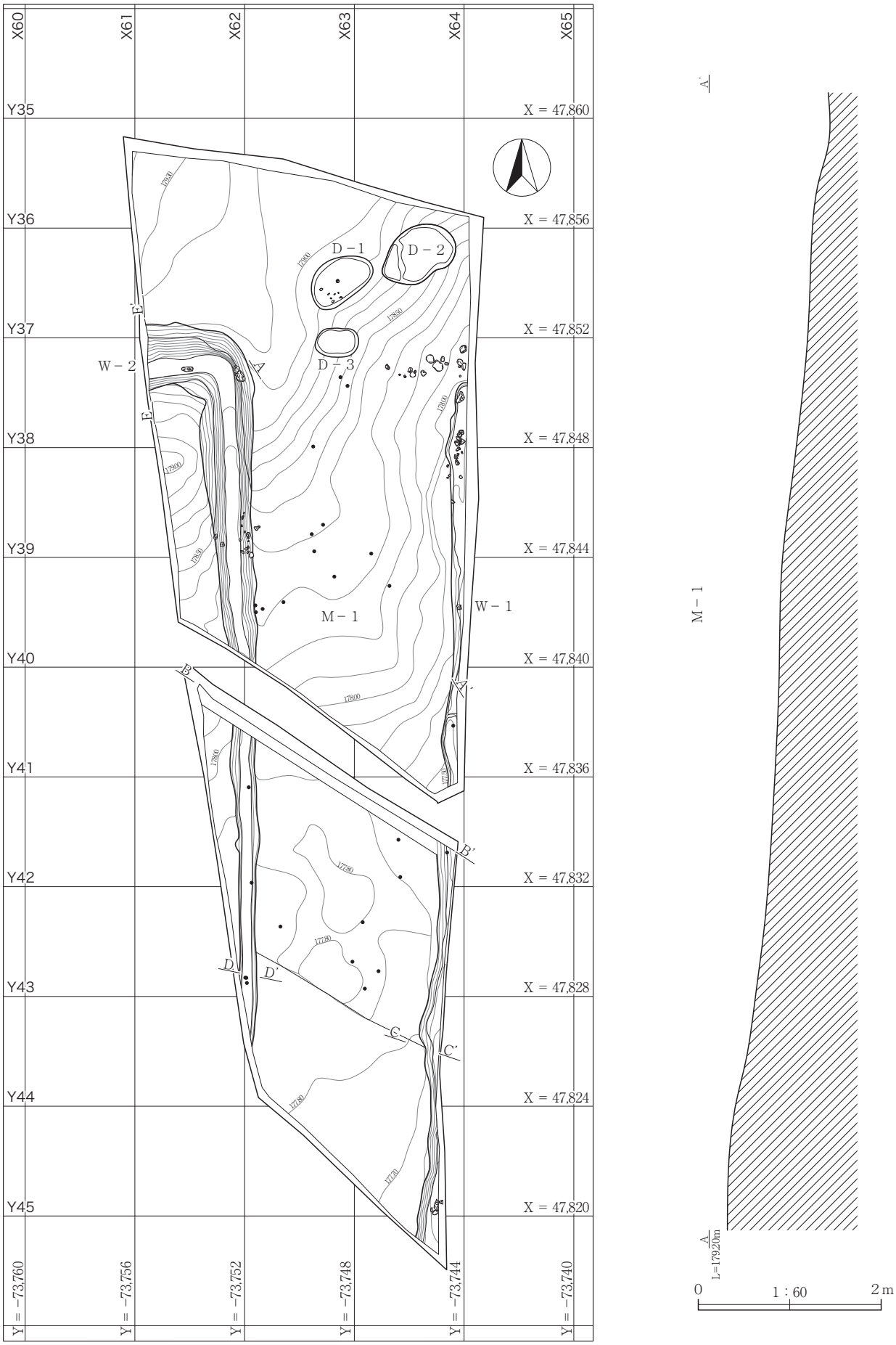
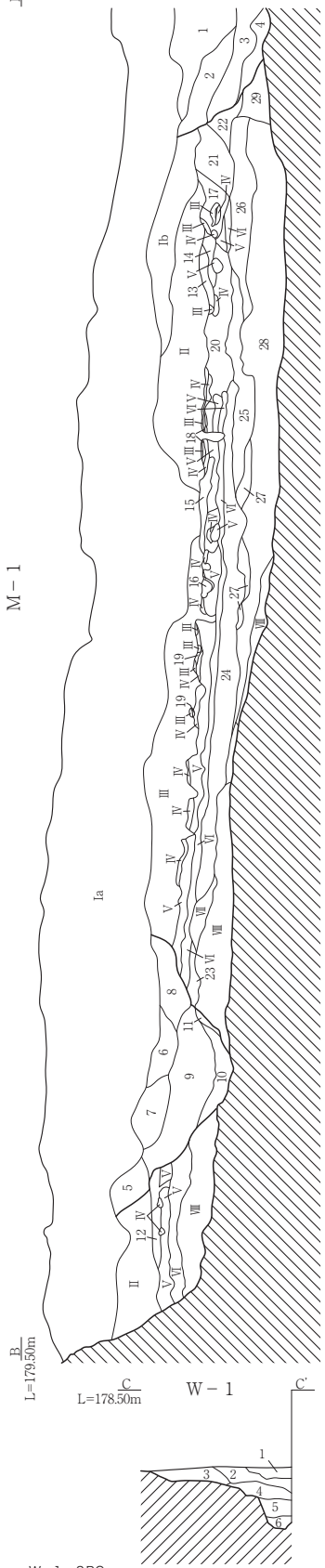


Fig. 4　池端屋敷小路遺跡全体図（1/200）

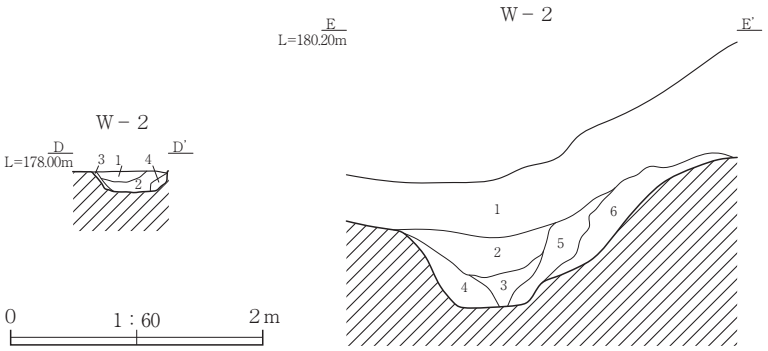
M－1、W－1・2



基本土層

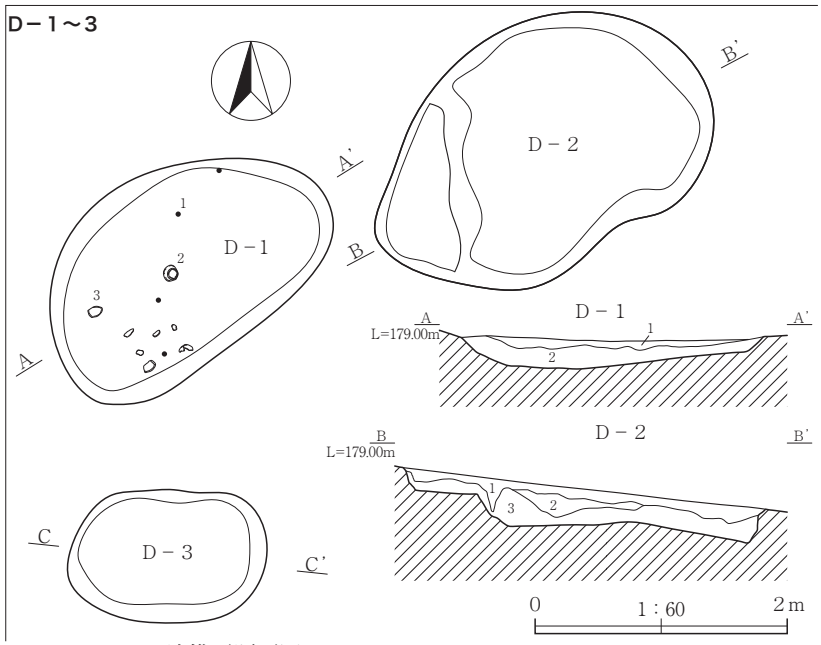
Ⅰ　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。bは黒褐色土（10YR3/2)細粒砂質土。１cm大の黄褐色土（10YR3/2)土ブロック少量。（表土）
Ⅱ　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまりやや弱、粘性弱。As-B軽石少量。
Ⅲ　青灰色土（5BG5/1）細粒砂質土。しまりやや弱、粘性弱。As-Kk火山灰一次的堆積層。
Ⅳ　灰赤色土（7.5R5/2）細粒砂質土。しまりやや弱、粘性弱。As-B軽石一次的堆積層上位のフォール・ユニット（桃色細粒火山灰層）。
Ⅴ　灰黄褐色土（10YR5/2）～褐灰色土（10YR5/1）細粒～粗粒砂質土。しまり・粘性弱。As-B軽石一次的堆積層。
Ⅵ　黒色土（10YR1.7/）細粒砂質土。しまり・粘性弱。
Ⅶ　褐色土（10YR4/4）細粒砂質土。しまりやや弱、粘性やや弱。（ローム漸移層）
Ⅷ　黄褐色土（10YR5/6）細粒砂質土。しまりやや強、粘性弱。5cm以下の礫少量。（ローム層）

M－1　SPB
1　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。５cm以上の礫少量。
2　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。
3　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。
4　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまりやや弱。黄褐色土（10YR5/8）土ブロック少量。
5　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。２～３mmの砂礫少量。
6　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。明緑灰色土（7.5GY7/1）極細粒砂質土少量混入。
7　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。１cm以下の砂礫ごく少量。
8　黒色土（10YR2/1）細粒砂質土。しまり・粘性弱。Ⅷ層土ブロック・As-B軽石・５cm大礫少量。
9　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。２～３mm砂礫少量。
10　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性やや弱、２～３mmⅧ層土粒少量。
11　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性やや弱。Ⅷ層土ブロックやや多量。
12　黒色土（10YR2/1）細粒砂質土。しまり・粘性弱。As-B軽石やや多量。
13　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱
14　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。As-B軽石やや多量。
15　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。黒色土（10YR2/1）土ブロック少量。As-B軽石やや多量。
16　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。As-B軽石多量。
17　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。As-B軽石やや多量。Ⅷ層土粒ごく少量。
18　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。As-B軽石多量。
19　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。As-B軽石多量。18層と同質。
20　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまりやや弱、粘性弱。黒色土（10YR2/1）土ブロック少量。As-B軽石やや多量。
21　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。As-B軽石やや多量。２～３mmⅧ層土粒ごく少量。As-B軽石やや多量。
22　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまりやや強、粘性やや弱。
23　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまりやや強、粘性やや弱。２～３mmⅧ層土粒少量。
24　黒褐色土（10YR3/2）極細粒粘質土。しまり・粘性やや強。
25　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまりやや強、粘性やや弱。５mm以下のⅧ層土粒やや多量、にぶい黄褐色土（10YR4/3）中粒砂質土少量。
26　黒褐色土（10YR2/2）細粒砂質土。しまりやや強、粘性やや弱。
27　にぶい黄褐色土（10YR4/3）中粒砂質土。しまり・粘性弱。黒色土（10YR2/1）土ブロック・Ⅷ層土ブロックやや多量。
28　黒褐色土（10YR3/2）極細粒粘質土。しまり・粘性やや強。暗褐色土（10YR3/4）ブロック少量。鉄分沈着あり。
29　黄褐色土（10YR5/8）細粒砂質土。しまりやや強、粘性やや弱。



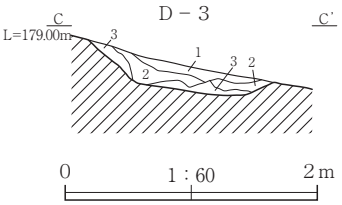
W－2　SPD
1　黒褐色土（10YR2/2）中粒砂質土。しまりやや強、粘性弱。２～３mm砂礫少量、２～３mmローム粒ごく少量。
2　黒褐色土（10YR2/2）中粒砂質土。しまりやや強・粘性弱。
3　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまりやや弱、粘性弱。
4　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまりやや強、粘性やや弱。２～３mmローム粒少量。

W－2　SPE
1　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。１cm大砂礫少量。表土。
2　黒褐色土（10YR2/3）細粒砂質土。しまり・粘性弱。数mm大砂礫少量。
3　黒褐色土（10YR3/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。数mm大ローム粒少量。
4　黒褐色土（10YR3/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。数mm大ローム粒やや少量。
5　暗褐色土（10YR3/2）細粒砂質土。しまり・粘性弱。黄褐色土（10YR5/8）土との混土。
6　黄褐色土（10YR5/8）細粒砂質土。ローム漸移層。



W－1　SPC
1　黒褐色土(10YR2/2)細粒砂質土。しまりやや弱、粘性弱。
2　黒褐色土(10YR2/2)細粒砂質土。しまり・粘性やや弱。
3　黒褐色土(10YR2/3)細粒砂質土。しまり弱、粘性やや弱。
4　黒褐色土(10YR2/2)中粒砂質土。しまり・粘性弱。
5　黒褐色土(10YR2/2)中粒砂質土。しまり・粘性弱。
　1cm以下のロームブロック・As-B軽石少量。
6　黒褐色土(10YR2/2)中粒砂質土。しまり・粘性弱。
　5mm以下ローム粒少量・As-B軽石少量。

Fig.5　遺構平断面図１



D－1　SPA
1　暗褐色土層（10YR3/3）粒子は細かく粘性なく、しまりも弱い。２～３mmのロームブロックを少量含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）粒子はやや粗く粘性は弱い。１mm前後の焼土粒子と炭化物粒子を大量に混入する。
D－2　SPB
1　暗褐色土層（10YR4/3）粒子は粗く、粘性なし。１mm前後のロームブロックを少量混入。
2　黒褐色土層（10YR2/2）粒子は細かく、強い粘性を示す。しまりも強い。１mm以下の焼土粒子・炭化物粒子を少量混入する。
3　茶褐色土層（10YR4/6）粒子は細かく、粘性・しまりなし。２～３mm前後のローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量混入する。
D－3　SPC
1　暗褐色土層（10YR4/3）粒子は粗く、粘性なし。１mm前後のロームブロックを少量混入。
2　黒褐色土層（10YR2/3）粒子は細かく、強い粘性を示す。１mm以下の焼土粒子・炭化物粒子を少量混入する。また、微量の灰を混入する。
3　茶褐色土層（10YR4/6）粒子は細かく、粘性・しまりなし。２～３mm前後のローム粒子を多量に、炭化物粒子を少量混入する。

Fig.6　遺構平断面図２

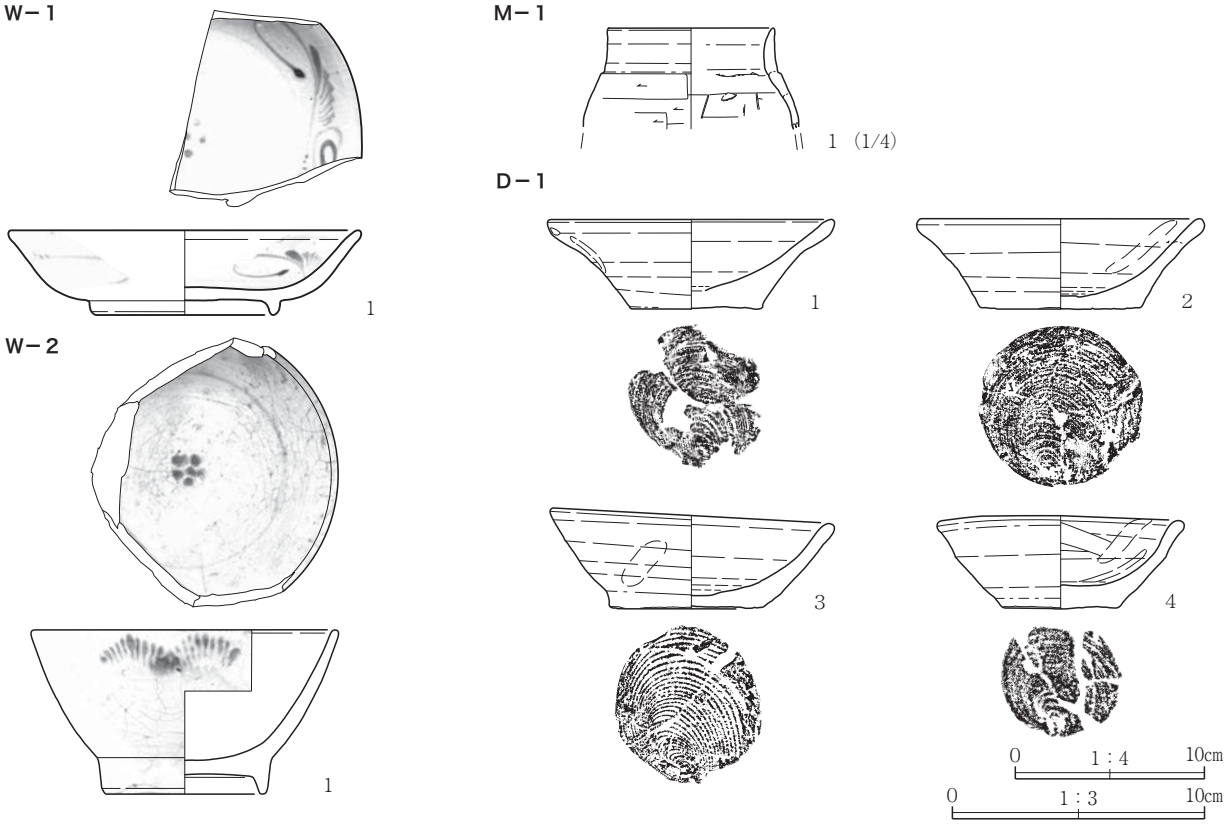


Fig.7　出土遺物

部は雑な回転糸切り、内外面ともにロクロナデ、焼成は酸化焔でやや不良。その時期については10世紀の所産と考えられる。

Ｄ－２号土坑（Fig. 5、PL. 1～3）

（X63、Y35・36）に位置する。周堀外周部壁にⅡ層直下、Ⅶ層上面で検出された。覆土は２層に分かれ１層にはAs-B軽石を少量含み、２層には焼土粒子・炭化物粒子を多量混入し、３層は小径のローム粒子を多量混入する。規模は長軸2.8 m、短軸1.9 mを計測する不整楕円形。底部は２段に構成されており、いずれも平坦な断面形状を呈し浅い底部で0.15 m、深い底部で0.35 mとなっている。 遺構確認面はＤ－１号土坑同様Ⅶ層上面である。出土遺物はないが覆土・形状からＤ－１号土坑同様の時期（10世紀）と考えられる。

Ｄ－３号土坑（Fig. 5・6、PL. 1～3）

（X62・63、Y36・37）に位置する。周堀外周部壁にⅡ層直下、Ⅶ層上面で検出された。覆土３層に分かれ１層にはAs-B軽石を少量含み、２層には焼土粒子・炭化物粒子を多量混入し、３層は小径のローム粒子を多量混入する。規模はＤ－１号・２号土坑に比して小さく長軸1.6 m、短軸1.2 mを計測する楕円形。底部は鍋底状を呈するが、東に向かって傾斜している。出土遺物はなく、形状はＤ－１号・２号土坑と異なるがその覆土から判断すれば、ほぼ同時期の所産と考えられる。

Tab. 2　池端屋敷小路遺跡出土遺物観察表

M－1

No	出土位置	種別・器種	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	土師器　壺	〔6.6〕	欠損	(5.4)	白・黒色粒、輝石。	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、口辺と肩部の境に明確な稜を有し、以下体部上位横位ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	口縁～肩部片。

W－1

No	出土位置	種別・器種	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	陶磁器　皿	〔14.0〕	〔7.0〕	3.4	粘土質	堅緻	灰白	轆轤成形。絵付け染付後、透明釉施釉。文様は外面に樹文、内面唐草文、見込みに五弁花が描かれている。	1/4 残存。肥前系。18 ～ 19 世紀か。

W－2

No	出土位置	種別・器種	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	陶磁器　碗	〔12.2〕	6.5	6.5	粘土質	堅緻	灰白	轆轤成形。絵付け染付後、透明釉施釉。文様は外面に松葉、内面見込みに五弁花が描かれている。貫入が顕著で、内面に多く認められる。	1/2 残存。美濃焼。広東碗。 18 ～ 19 世紀。

D－1

No	出土位置	種別・器種	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 2・覆土	須恵器　埦	11.4	5.2	3.5	白・黒色粒。	酸化焔 軟質	にぶい黄橙 褐灰	外面ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	2/5 残存。
2	No. 3	須恵器　埦	〔11.2〕	6.3	3.7	黒・茶色粒。	酸化焔 軟質	明黄褐	外面ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	2/3 残存。
3	No. 4	須恵器　埦	11.5	6.1	4.1	白・黒色粒、茶色粗粒。	酸化焔 軟質	にぶい黄橙 褐灰	外面ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	3/4 残存。 歪み有り。
4	一括	須恵器　埦	〔9.8〕	4.8	3.7	白・黒・茶色粒。	酸化焔 軟質	にぶい黄橙 褐灰	外面ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ。	2/5 残存。

Ⅵ　まとめ

今回の発掘調査では、古墳時代後期の周堀と考えられる遺構、平安時代・中近世の遺構が検出されたが、Ⅴ章で触れた発掘区ほぼ全域が周堀内という結果について、資料の少なさはあるものの検討を加えてみたい。

今回の発掘調査に先立ち、前橋市教育委員会による試掘データから周堀の可能性が提示され、発掘調査の事前準備として墳丘とその周辺の地形について踏査を行った。

古墳の規模・形状

隣接する古墳は発掘調査区域外、発掘区東側に隣接する神明宮を墳丘頂部に鎮座させる。その規模については、直径約 26 mを計測し、平面形状は不整円形を呈する。また、現地表からの比高差は約 4 mを計測する。墳丘頂部は神明宮創設時に削平されたと思われ、南側の参道階段部も同様に整形されたものと思われる。

墳丘は盛土によって形成され、木々により森のような状況を呈し墳丘頂部及び南側階段部分を除き、残存状態は良好であるといえる。墳丘裾部と周辺平坦面を区画する基底ラインは、葺石等の境界も構成されていない。現形状は直径 26 mの中にほぼ収まる不整円形であるが、その西側を群馬用水、北と東は畑地、南側は神明宮の参道となっており、墳丘裾部は削平をうけてその規模を縮小された可能性がある。

周堀

周堀についてはⅤ章において述べたが、本章で改めて記述する。発掘区域内で検出した周堀外周部は（X61 ～ 64、Y36 ～ 38）に一部に肩部として、その形状を現している。また外周肩部より南東方向側に向かい、本来の地形と異なる傾斜を現し周堀最深部を示していると考える。また、土層堆積状況を示す（Fig. 5　M － 1 SPB）においても東西方向に同様の傾斜を示している。

外周肩部と発掘区域内周堀最深部と思われる比高差は約 1.3 mを計測する。しかしながら周堀中央最深部と推定される区域は、発掘区域外東側である群馬用水が通る場所と考えられ、発掘区域内東端部には W － 1 号溝が南北方向に縦断しており本来の最深部を計測することはできなかった。発掘区（X62、Y36）の外周部から墳丘中央までの距離は 40 mを計測し、墳丘の規模に対してかなり大きい数字となる。また、必ずしも墳丘の形状に

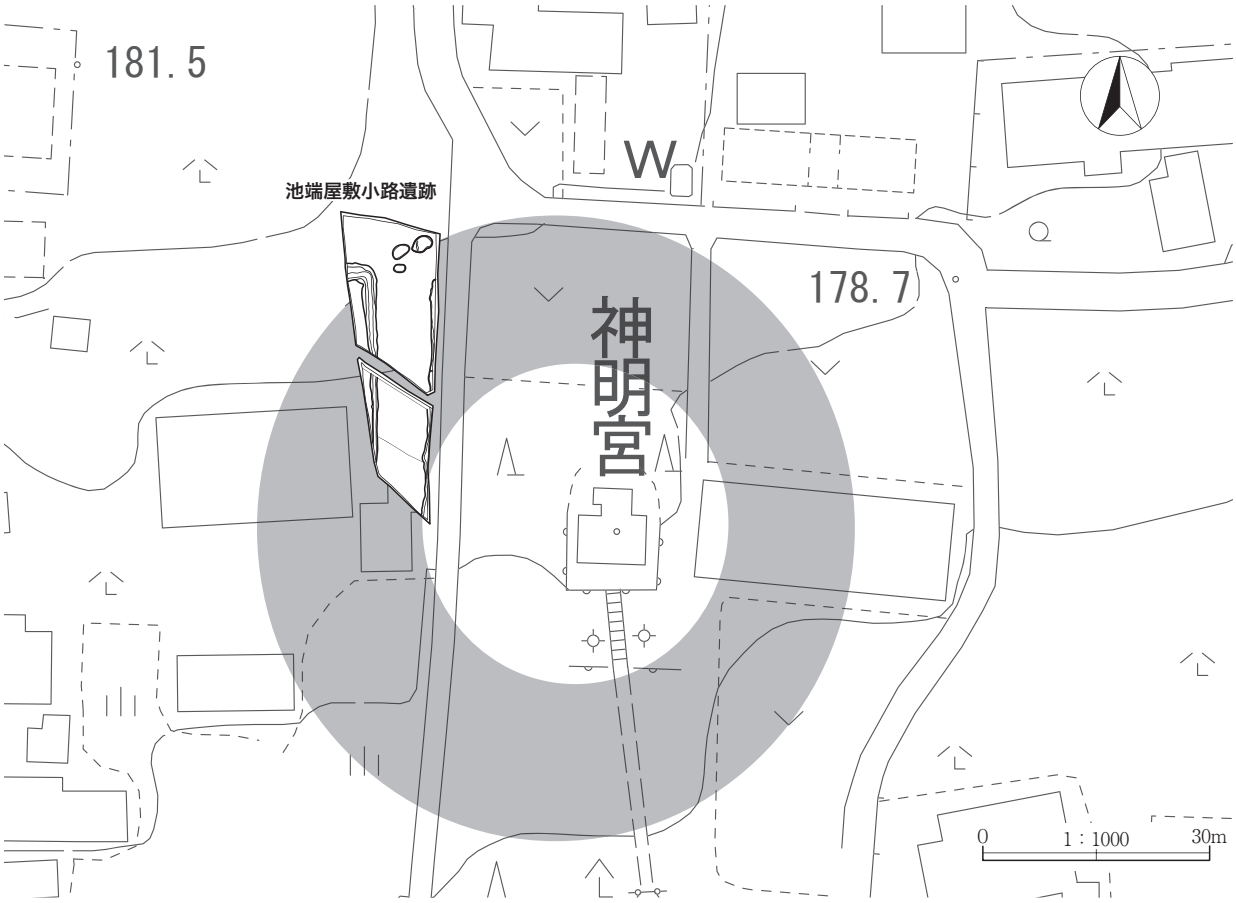


Fig.8　周堀想定図

沿っておらず、丸みを帯びた角を現している。周堀内の堆積土はⅠ層の表土をのぞいて底部のⅦ層まで大きく6層に分けることができる。堆積層は下層～上層まで自然堆積を示しており、黒ボクやロームブロックといった底面の凹凸を調整する整地層の痕跡はみられなかった。

先にも述べたとおり、本遺跡の発掘区南側全域においては、発掘区北側の傾斜に比してその傾斜は比較的緩やかであるが本来の地形を示している。古墳北部の畑地から古墳南側参道までと同様、発掘区においても北から南に向かって緩やかな傾斜を示し、その比高差は約2.5ｍを計測する。本遺跡は周堀内に位置するものであり、周堀外周部は発掘区域外である西側を巡るものと考える。

上記の記載については検討材料が少なく、発掘面積が小さく古墳周堀のごく一部を調査したに過ぎないが、調査結果と可能性について述べてみたが、推論の域を脱したものとは言いがたい。今後、周辺地域の調査事例が増加し、それらの資料によって改めて検討されることを期待する。

参考文献

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986　『清里・長久保遺跡』
吉岡町教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団　1986　『七日市遺跡　滝沢古墳　女塚遺跡』
東吾妻町教育委員会　2003　町内遺跡Ⅰ『小泉宮戸遺跡』
吉岡町教育委員会　2017　『七日市遺跡』
前橋市教育委員会　2011　『総社町屋敷南遺跡２』
前橋市教育委員会　2018　『山王若宮Ⅴ遺跡』

写真図版

調査区全景（上が北）

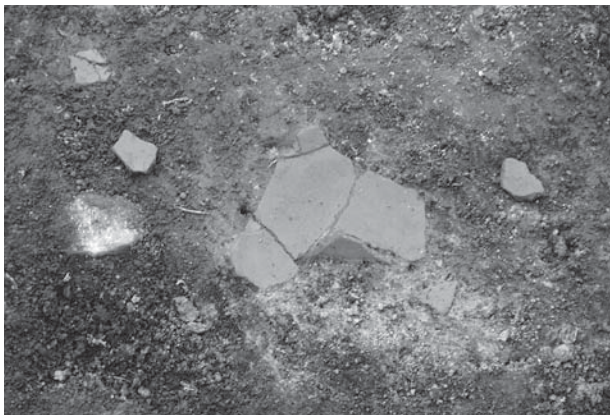
調査区北側（上が北）

調査区南側（上が北）

調査区土層断面（南から）

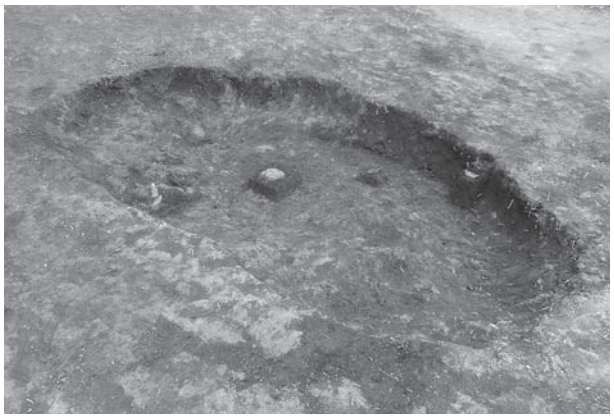
調査区北側　周堀・土坑発掘風景（南から）

古墳周堀外周（白線部）検出状況（南から）



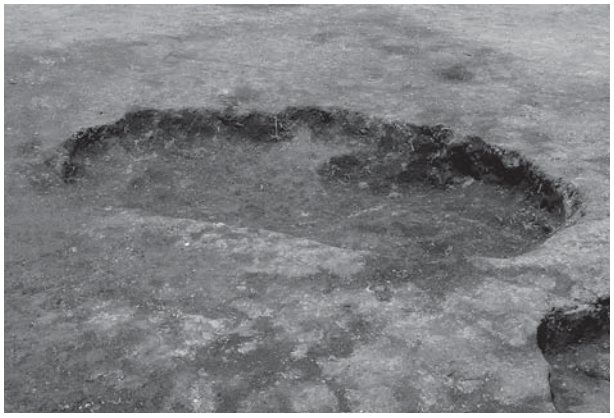
調査区北側遺物出土状況

Ｄ－１土層断面（南から）

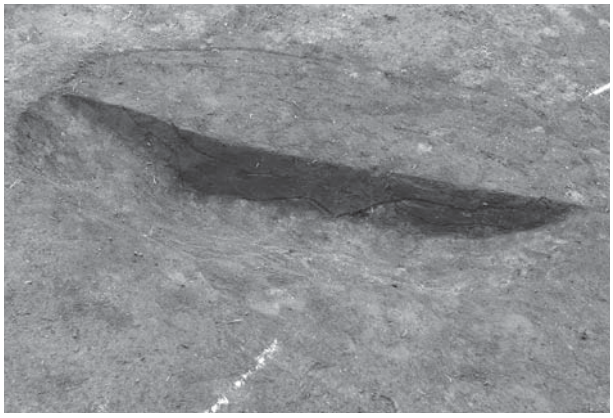


Ｄ－１遺物出土状況

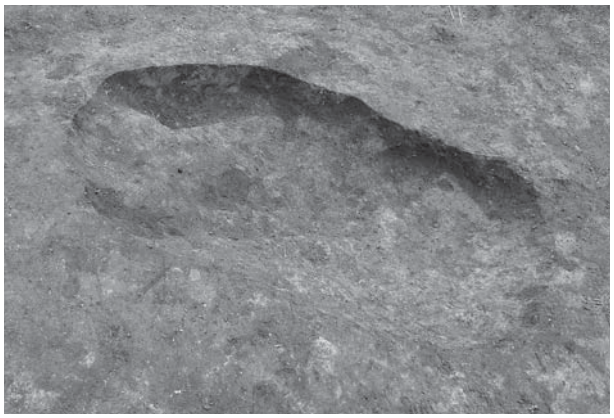
Ｄ－２土層断面（南から）



Ｄ－２全景（南から）



Ｄ－３土層断面（南から）



Ｄ－３全景（南から）

Ｗ－１土層断面（南から）

Ｗ－２発掘風景（南東から）

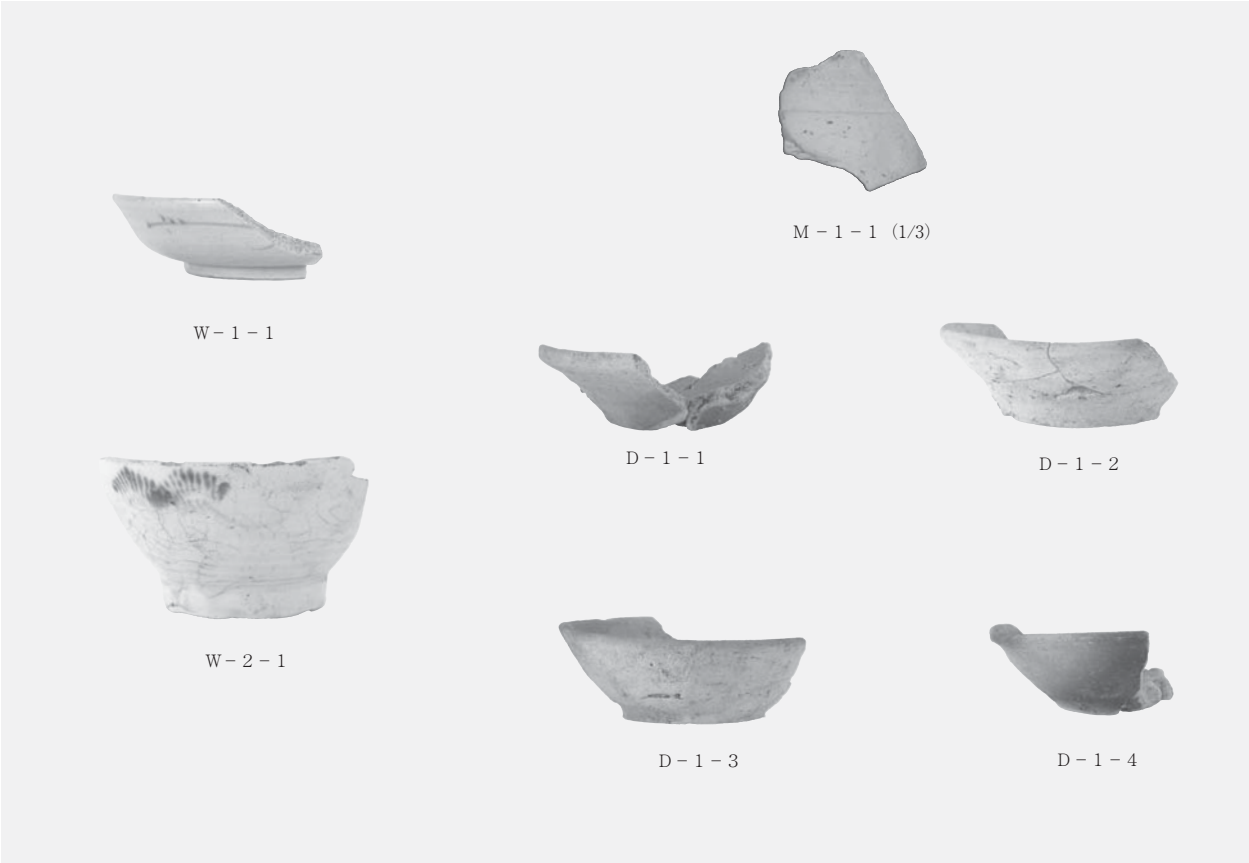
Ｗ－２土層断面（東から）

Ｗ－１全景（調査区北側）

Ｗ－１全景（調査区南側）

Ｗ－２全景（調査区北側）

Ｗ－２全景（調査区南側）



池端屋敷小路遺跡　出土遺物

報告書抄録

ふりかな	いけはたやしきこうじいせき
書名	池端屋敷小路遺跡
副書名	清里地区南北幹線２期整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	－
シリーズ名	－
シリーズ番号	－
編著者名	高橋政充
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371－0031　群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371－0853　群馬県前橋市総社町３-11-4
発行年月日	2020年７月30日

ふりがな	ふりがな	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
池端屋敷小路遺跡（いけはたやしきこうじいせき）	前橋市（まえばしし） 池端町（いけはたまち）154-10、154-11	10201	2A253	36°42’81	139°1’8	20200520 ～ 20200608	436㎡	清里地区南北幹線２期整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池端屋敷小路遺跡	古墳	古墳 奈良 近世	周堀　１条 土坑　３基 溝　２条	土師器 須恵器 陶磁器	・古墳の周堀 ・江戸期の区画溝

池端屋敷小路遺跡

清里地区南北幹線２期整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年７月29日　印刷
2020年７月30日　発行

発行　前橋市教育委員会
〒371－0853　群馬県前橋市総社町３-11-4
TEL　027-280-6511

編集　技研コンサル株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社